血液製剤の廃棄率とその原因についての解析

◎溝上 真衣[1)]、若宮 理桜奈[1)]、柏木 美紀[1)]、藤好 麻衣[1)]、江頭 弘一[1)]、川野 祐幸[1)]
久留米大学病院[1)]

【はじめに】血液製剤は、善意に基づく限りある医療資源である。近年、新型コロナウイルス感染拡大や少子高齢化による血液製剤の供給不足が懸念されている。その貴重な血液製剤を有効利用することは、医療従事者の責務だと考える。当院は、高度救命救急センターを有する特定機能病院であり、日々多くの血液製剤を取扱っている。一方で、使用されず廃棄となった製剤も少なからず存在する。今回我々は、当院における血液製剤の廃棄率とその原因について解析を行ったので報告する。

【対象と方法】2019 年から 2021 年の 3 年間における血液製剤の購入本数と廃棄本数から各年の廃棄率を算出した。また、廃棄製剤についてその原因を集計し、解析を行った。

【結果】血液製剤の総購入本数、廃棄本数、廃棄率は 2019 年：19,113 本 29 本 0.15%、2020 年：17,394 本 32 本 0.18%、2021 年：18,735 本 13 本 0.07%であった。廃棄原因の件数(件)は、2019 年:破損 11、輸血準備の手技未熟 5、保存状態不良 3、患者状態により未使用 3、その他 15、2020 年:破損 7、保存状態不良 5、輸血準備の手技未熟 5、その他 8、2021 年:破損 7、使う必要がなかった 3、その他 3 であった。

【考察】廃棄製剤は、新鮮凍結血漿製剤(以下 FFP)とアルブミン製剤(以下 Alb)の割合が高く、その原因として破損によるものが多くを占めていた。3 年間でその件数は減少しておらず、製剤の取扱いについて更なる教育が必要であると考える。廃棄率は、3 年間で 2021 年が最も低かった。2019 年と 2020 年で、上位を占めていた保存状態不良や輸血準備の手技未熟による廃棄件数が 2021 年で 0 件であることに起因している。これらの改善については、輸血マニュアルの整備や輸血療法委員会での報告などの啓蒙活動が有効であったと考える。

【まとめ】血液製剤の使用・廃棄状況の報告などの啓蒙活動、血液製剤の取扱いや保管管理さらに輸血実施業務などの教育を継続的に行うことで、廃棄製剤の更なる減少と血液製剤の有効利用に努めていきたい。

連絡先　0942-31-7650(直通)